

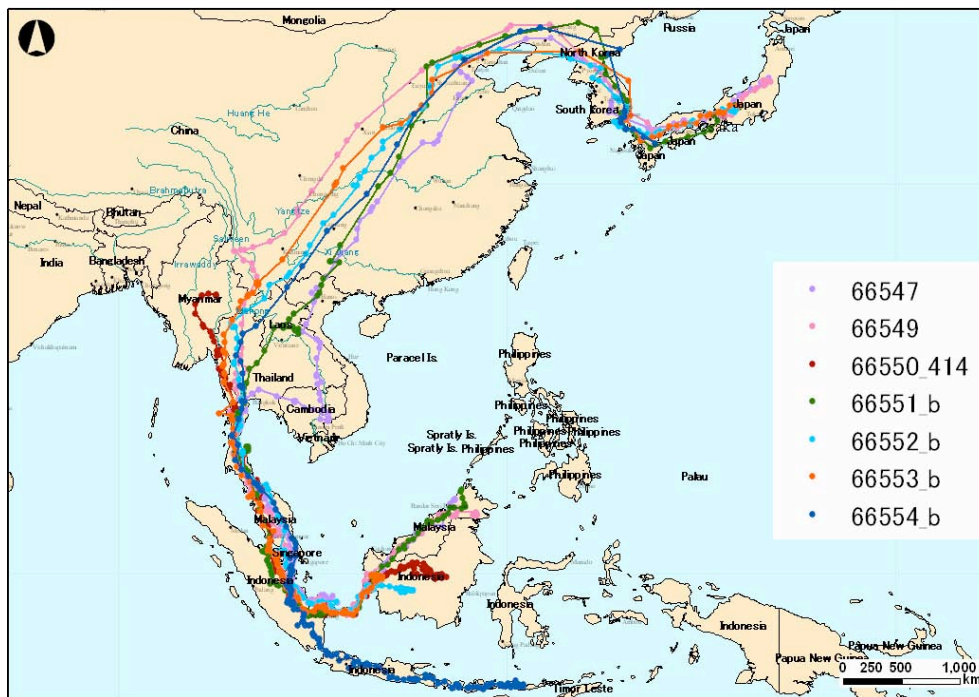
ハチクマの春秋の渡り衛星追跡—10羽の成鳥の記録—

○時田賢一（我孫子市鳥博）、藤田祐樹・平岡恵美子（東大・農）、植松晃岳・久野公啓・佐伯元子（信州タカ渡り研）、内田聖（里山自然研）、中山文仁・高橋誠（環境省猛禽類保護セ）、堀田昌伸（長野県環境保全研）、中村浩志（信州大・教育）、山口典之・樋口広芳（東大・農）

我々はこれまですでに、ハチクマの渡りについてその経路や渡り様式、中継地などについて記載してきた。しかし、それらの情報は最大で成鳥 2 羽、幼鳥 1 羽からのもので、その結果がこれらの個体のみが示す特徴なのか、種あるいは個体群が持つ特徴を示しているのかを明らかにできなかった。

今回我々は、さらに 2006 年秋から成鳥 8 個体を対象に衛星追跡を行い、合計成鳥 10 羽について春秋の渡り経路と中継地に関する情報を得たので報告する。秋の渡りにおいてハチクマは、山形および長野の繁殖地から国内を西進、九州北西部から東シナ海を横断し、中国内陸を直線的に南下した。さらに、東南アジアからマレー半島南端に至った。ここまでは個体間で共通していたが、マレー諸島あるいはボルネオ、フィリピンのどこで越冬するかと、その越冬期間については個体ごとにより異なっていた。春期の渡りでは、いずれの個体も中国に到達する直前に、最大一ヶ月以上もの長期間、ひとつの中継地に滞在することがわかった。ただし、中継地点は個体ごとに大きく異なっていた。また、秋期には横断した東シナ海を大きく迂回し、朝鮮半島経由で日本国内に入ることも、全個体で共通していた（下図参照）。

全体として、これまでに成鳥 2 羽のみで報告した結果が、日本国内のハチクマに共通する特徴であることが示唆された。



2007 年春の渡り衛星追跡結果。7 羽の記録。